~中大生の必読紙~
「中央大学新聞」を定期購読で
1年間 800円（郵送料共）
2年間 1500円（郵送料共）
お申し込みは振替口座・東京47046番へ

中央大學新聞
第929号 昭和45年10月20日 火曜日 週刊
定価 10円 発行所 中央大学新聞学会 東京都千代田区神田駿河台3の9
昭和8年9月21日第3種郵便物認可 （毎月4回火曜日発行）振替口座東京47046

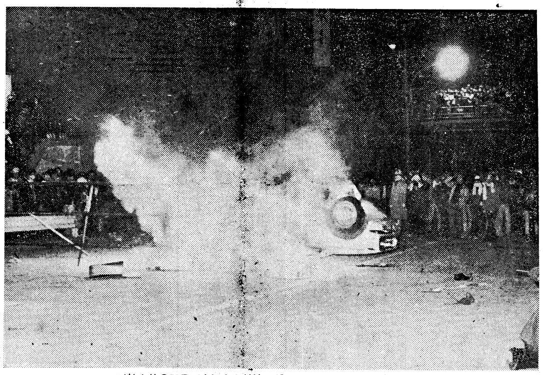
学生の本 学生の書店
文苑堂書店
神田駿河台下 291-8771

全関東で労・学3万人が決起！

10・21国際反戦デー

入管 叛軍 闘争を圧倒的に貫徹
一部で実力闘争を展開す
10・21全関東労・学総決起集会

○二十一日、入管体制粉砕、叛軍、沖縄国政参加選挙粉砕に向けた「10・21全関東労学総決起集会」が開かれた。会場の日比谷野音には、およそ三万人が結集し、入管法国会再上程阻止、自衛隊沖縄派兵阻止などを圧倒的に確認した。集会の後、午後9・30分からデモ行進に移り、途中、反帝学評、反帝戦線などが一部実力闘争を展開し、また日大全共闘をはじめとする部分も、神宮前三丁目で、バリケードを構築したりしてゲリラ闘争を展開した。これに対して機動隊は、百四十余名を不当逮捕し、弾圧したが、明治公園までデモ隊は圧倒的なデモを貫徹し、午前一時三十分ごろ解散した。○


神宮前3丁目で車に火を付け、ゲリラ闘争を展開するデモ隊。

10・21国際反戦デーの日、入管法国会再上程阻止、入管体制粉砕と自衛隊沖縄派兵阻止四次防粉砕「72年沖縄返還」策動＝国政参加選挙反対に向けた「10・21全関東労学総決起集会」が日比谷野音で開催された。これより先、午後4時から芝公園において各党派、全共闘などが集会を開き、7時前に日比谷野音の集会にデモ行進を行なって結集した。

全関東から結集した労働者、学生およそ三万人で野音は一ぱいになり、各大学全共闘、大学べ平連の一部は野音の外で集会を開催するという情況の中で、午後7時より全国反戦の今野氏と全国全共闘の鈴木氏の司会で統一集会は開催された。まず東京入管闘、北富士忍草母の会からの連帯の挨拶があり東京入管闘からは、在日朝鮮人、中国人の国籍書換えは、入管地区実行委を組織して闘い貫くという決意表明があり現在北富士演習場内の座り込み小屋を強制撤去するという弾圧を米軍、自衛隊一体となってかけられて来ている忍草母の会から、入会地奪還まで断固闘いぬくという決意表明があった。つづいて三里塚・芝山連合空港反対同盟の戸村委員長からのメッセージ、全国隊友反戦結成を勝ち取った小西誠氏からのアピール、外人べ平連を代表して、ビクトリア良潤さんからの挨拶があり特に戸村委員長のメッセージには、現在土地強制収用のために特別措置法の摘要を決定した空港公団＝国家権力との最後の決戦が迫っていることを報告した後、農民にとって土地は生命、家は城であると結び、圧倒的な拍手を受けていた。集会は新宿騒乱（68年10・21）同防衛庁闘争被告団、同国会突入被告団、69年10、11月闘争被告団の決意表明の後、各党派からの発言に移った。その中で反帝戦線（共産同戦旗派）から68年10・21以来の総動員をもって、武装闘争を叛軍闘争の一大焦点である、防衛庁に向けて展開する。70年代日帝の軍事外交路線を叛軍闘争の推進をもって粉砕し、恒常的武装闘争を全国基地、帝国主義軍隊解体＝ソヴィエト型組織建設として闘いぬくとの発言があり、午後9時すぎ集会を終えた。

全国全共闘の実質的な解体と、階級情勢の一定程度の後退を余儀なくされた新左翼諸党派は、入管法再上程、72年沖縄返還、自衛隊進出を軸とする日帝のアジア再侵略策動粉砕、国内再編粉砕に向けて、今秋の最大闘争としてあった10・21国際反戦デーに入管体制粉砕を媒介に総力を挙げて取り組んで来た。それは関東段階だけで三万人を結集するという大衆的な確認を受けたわけであるが、一方、昨年の10、11月決戦以降、全共闘運動の崩壊から来る情勢の総括とこれからの運動の展望、統一戦線の明確な位置付けを出し切れてない現在の情況は、さらに内部論争などの深化によって確立されねばならない。また全国隊友反戦、叛軍闘争委、地区入管闘などが結成し、あるいはしつつある情況の中で、新たな共闘組織の建設と位置付けが問われていると言えよう。

集会の後、午後9時30分ごろからデモ行進に移り、虎ノ門→溜池→六本木→麻布2丁目→神宮前3丁目→明治公園のコースでデモ行進に移った。各大学全共闘、フロント、反帝戦線、社青同解放派、第4インター、中核派、市民と続く三万有余のデモ隊は、機動隊の弾圧をはね返してデモを貫徹した。途中、反帝学評系のデモ隊は、虎ノ門付近で竹ザオ、タテによる実力闘争を展開し、また反帝戦線の部隊も六本木防衛庁前で、竹ザオで突入をはかったが、4機に粉砕された。さらに11時30分ごろから日大全共闘の部隊や、先に明治公園に到着した部分が神宮前3丁目でゲリラ闘争を展開し、車に火が付けられ、投石で機動隊に対抗した。このため機動隊は明治公園に逃げたゲリラ隊に対してガス弾を公園内に乱射するなどの弾圧をかけた。12時ごろから部隊ごとに流れ解散をしたデモ隊は、最後の中核派の総括集会が終った午前1時30分ごろには、ほぼ解散した。なおこの日、権力によって不当逮捕された者は百四十余名にも上った。

入管 叛軍 闘争に決起せよ
べ平連、七千名を結集

べ平連は独自の集会を清水谷公園で開催した。午後6時から開催された「この体制にはがまんならない10・21反戦市民集会」は「声なき声の会」などの市民団体、中大べ平連をはじめとする各大学べ平連などおよそ7千名が結集した。集会は日本軍国主義体制、入管体制、アジア侵略体制を批判し入管法国会再上程阻止と叛軍行動を軸に、この体制をぶっつぶすことを確認して午後7時に終った。その後デモに移り、赤坂見付→虎ノ門→新橋→有楽町を経て東京駅八重洲口までデモ行進した。隊列は各市民団体、大学べ平連の順で赤坂見付の辺から大学べ平連は、終始機動隊のサンドイッチ規制や並進規制による弾圧を受けたがデモを貫徹し、午後9時30分八重洲口で流れ解散し、大学べ平連の一部は、日比谷野音の集会に合流した。なおべ平連は十一月一日の自衛隊軍事パレードに向けて抗議行動を提起しており注目される。

革マル派も明治公園で集会とデモ

革マル派は、明治公園で6時30分から「10・21反戦、沖縄、反安保、入管闘争大統一行動」を開催し、およそ三千名の〝全学連〟反戦青年委、反戦高連の労働者、学生、高校生が結集した。集会は中執から、六月安保闘争の敗北を現実的に受け止め、沖縄闘争の危機的情況を左翼的に突破し、日常の秩序支配に組み込まれる「国政参加選挙」粉砕に向けて闘争を組んで行くという報告があり、9時15分デモに出発した。デモは青山一丁目→赤坂見附→日比谷公園のコースで、途中機動隊の規制を受けながらデモを貫徹し、日比谷公園で、今後さらに11・15、11・22に向けて統一行動を推進することを確認して、11時30分解散した。

関西地区でも一万名が決起 —10・21—

関西地方でも午後七時より「10・21労学市民統一集会」が開かれ会場の大阪大手前公園には、各党派、全国西全共闘、べ平連などおよそ一万名が結集した。集会の後8時すぎからデモに移り、御堂筋から梅新中央郵便局前までデモ行進し、10時頃解散した。

10・21に向け 各大学でストに突入
中大は全学ロック・アウト

10・21国際反戦デーに向けて各大学ではスト権の確立、バリケード・ストなどの行動を提起していたが、横浜国大では、経済学部での民青系執行部を全共闘がリコールするなどして全学ストに突入した。また慶応大日吉、一橋教養、東洋大社会学部、静岡大教養、同志大全学、京大文学部、関西学院大法学部などが、それぞれストに突入した。

一方10・21を前にした一部の大学では中大をはじめ、法政大、東洋大、日大、早大、東海大などが全学ロック・アウト体制を敷き、権力と密着した大学当局は、闘争の圧殺をはかった。

書泉ブックマート 294-0015（代）
駿河台下角・綜合書店ビル
営業時間 平日 10:00～7:00 日祭 10:00～6:00
4階 美術・家庭・児童
3階 辞典・参考書・図鑑
2階 理工学・医学・農業
1階 雑誌・文学・文庫
地階 法律・経済・社会
※新刊雑誌1,500点を常時そろえてあります。
書泉 SHOSEN 千代田区神田神保町1－3
294-0011（代）
本店ビル改築中 昭和46年4月完成予定（地上8階 地下1階）

全学新 都学新 再建問題に関する われわれの基本的見解

中央大学新聞学会

先月、関学新（関西学生新聞連盟）書記局から「全学新（全国学生新聞連盟）再建大会議案書（草案）」が提起されたのをはじめとして、全国各地における少なからずの学新が、全学新再建問題に取り組み始めている。

このような情勢の中で、「全学新および都学新の再建問題について」のわれわれの基本的な見解を若干示しておきたいと考える。

六十七年10・8闘争において復権した革命的左派の「暴力」は、エンプラ、成田、王子闘争を経て、六十八年全国学園闘争において「大衆武装」として全面的に開花した。

しかし、六十九年4・28闘争を契機として、実力闘争の「武装」の質が真に問われ、昨秋安保決戦においては、それは「党派軍団」としてしか表現しえず、敵権力に軍事的・政治的に敗北することによって、それ以降の後退局面が生み出されている。

一方六十七年から六十八年における学新運動の中心は「全学新第24回大会議案書」に見られる「反『帝国主義イデオロギー』統一戦線論」であった。この「反『帝イデ』統一戦線論」は、当時の運動基盤が全学連運動（三派全学連→党派全学連）にあったがゆえに、その正当性は一定程度評価できるものであった。しかし、党派全学連運動が全共闘運動によってのりこえられ、その運動基盤を喪失した「全学新」は自然崩壊してしまった（68年）。

そのような情況において登場したのが、全共闘機関紙（東大の『進撃』、京大の『ストラッグル』など）である。これら全共闘機関紙も、一定程度の役割を果しつつも、全共闘運動の後退とともに、多くは廃刊という事態に追い込まれているのが現状である。

このような現段階において、われわれが新たな学新運動を展開しようとするとき、最も要請されるのが、全共闘運動の総括であろう。これを抜きにして、新たな運動ー組織実体の問題を語ることは決してできないだろうし、もし全共闘運動を体験した学新主体がいまだに実質的な運動基盤を全学連運動に置いているとしたら、それは語るに落ちる。

全共闘運動の総括がまだ不充分な現局面において、われわれが明確な「学新運動論」を提出することは不可能に近いことではあるが、一つのイメージとして次のようなことを提起するので、各学新の討論の素材として欲しい。

「反帝イデ統一戦線論」が依拠していた全学連運動の組織構造は党ー活動家集団ー大衆であった。この党ー活動家集団ー大衆という組織構造が、全共闘運動の過程で崩壊し、現在新たな組織構造が要請されている。その新たな組織構造が、党ー軍ー統一戦線であるといえるだろう。

党ー軍ー統一戦線という組織構造の中で、学新（もはや個別学新の枠ではとらえきれないわけだが）の具体的な運動基盤となる統一戦線として、「地区共闘」を位置づけたい。

個別大学の枠を突破し、また産別としての学新の枠を突破して、労働者・地区住民と結合したところの運動ー組織実体の交通・情宣を保障する形において、これからの学新運動の展望が見い出せるだろう。

現在、われわれが緊急の任務として確認していることは、運動実体のない古い組織の再建よりも、新たな組織構造を展望した新たな運動ー組織実体の構築なのである。

以上のようなわれわれの基本的視点から、現在進行している「全学新・都学新の再建」問題に関しては、消極的な態度をとらざるを得ない。関学新書記局による「第25回大会議案書（草案）」においても、全共闘運動の総括は十分になされていないし、学新間の論争もまだ決定的に不十分である。そのような段階で、再建スケジュールだけが先行している観をまぬがれない。このようにして再建される「全学新」は、決して良い結果をもたらすことはないだろう。

われわれは、全共闘運動の総括の基軸を「階級形成」と「軍事」に置いて、今後さらに緻密な総括論争を展開すると同時に、学内・学外における具体的な運動を自ら担いつつ、新たな運動ー組織実体の形成をはかっていきたいと考えている。

また、各学新との論争や共同デスクなどに関しては、さらにあらゆる機会を利用して促進したいと思う。

最後に、すでに来月に予定されている「都学新再建大会」については、われわれは態度を保留することを表明する。

一九六九年十月二十日

民青がテロ 緊迫する学内状勢

従来の大学の年中行事にのっかって「白門祭」を提起し、推進する日共＝民青系学生と、それに対し、自らの党派利害にもとづくところの白門祭の全くのデッチあげ私物化であり、かつまた、大学の共同幻想体の一補完物としてしか存在しなかった旧来の白門祭に何ら根底的な批判、総括を加えることのない、全くの〝お祭り〟的なものにすぎない、として日共＝民青系学生の提起する「白門祭」に反対する学生との緊張、対峙関係は十六日以降ますます強まっていった。

十一月初旬に「全学白門祭」を予定し、着々とその準備を進めていた夜間部自治会、昼間部正式代表団を中心とする日共＝民青系学生は、十六日に設定していた「白実委」結成大会が文字どおり〝粉砕〟され、「白門祭」実現の可能性があやぶまれてきたことからますますそのアセリを深め、十七日以降連続的にテロ・リンチ等々をデッチ上げ「白門祭」に反対する学生に加えてきている。

十七日、十九日には都学連部隊の応援を含む数百名の日共＝民青系学生が、大学周辺はおろかお茶の水駅付近などにテロ体制をひきその上淡路公園や小川町の某喫茶店などにいた反対派の学生をも襲撃するという、卑劣で陰険な手口を使うという有様であった。この徹底したテロ行為によって二十数名の学生が傷つけられ、そのうち四名が頭などに重傷を負った。これに対し、革マル派などの学生は断固抗議するとともに民青系学生から自己批判書などをとりつけている。

こうした緊張関係のなかにあって、十九日夕には双方が衝突し、合わせて七名の学生が官憲によって逮捕される事態もおこったため、十九日夜から二十一日にかけて、大学当局は不当にも全学をロック・アウトし学生の大学からのしめ出しを計った。しかし、これは明らかに十・二一国際反戦デーに対処するものとして、権力と一体となった行為であった。

二十日には午前十時すぎから、正門前で当局の一方的ロック・アウトに抗議するとともに、民青のデッチ上げ白門祭粉砕の集会が、各クラス・サークル闘争委員会を中心におよそ二百名の結集下のもと行なわれた。

その後もひきつづき学内は緊張状態にあるが、この一触即発の事態に対して大学当局がいかなる態度でのぞんでくるかということも、また、注目されることである。

国立音大で学費値上げ阻止

五割の授業料値上げで学生側と団交が続いている国立音楽大学（有馬大五郎学長）では、五回目の団交が開かれた。13日午後一時から14日にかけて26時間にわたる徹夜団交の後、学生側は、理事者側から学費値上げ白紙撤回を獲得した。

東経大授業料値上げ粉砕迫る

東京経済大学では13日から授業料値上げ約三割を発表した後、学生側などのストライキ、団交が続いていた。14日には昼間部自治会（民青系）が午後一時半から第二校舎会議室で大学側と交渉を開くことにしていた。それを前に全共闘学生が午前十一時頃から井汲学長、学部長など四人を本館一階の学長室で授業料値上げ白紙撤回を迫った。

中京大も白紙撤回

不当な学費値上げに反対し、全学ストライキが続く中京大（梅村清明学長）においては24日午前、大学側と大衆団交が持たれた。この団交で学生側は「来年度の学費値上げ決定を白紙撤回する」を大学側から獲得した。

ストライキは、教職組合、教授会から批判が出たり、体育会系学生の暴力などで弾圧を受けたがついに理事者側から白紙撤回を獲得した。

波紋

〝トロッキズム〟〝スターリニズム〟という言葉をよく聞くが、われわれはこの言葉を安易に使いすぎてはいないだろうか▼ロシア革命でレーニンとスターリン、トロッキーとスターリンの、党内闘争の過程でスターリンはレーニンの遺書をまっ殺し、トロッキーを追い落し、暗殺し権力をスターリンという個人に集中した▼トロッキズムとは何か？と聞かれた時「党の歴史は官僚が決定するものとし、創造的なものを否定するためにレーニンの文章を歴史のコンテキストから剥離して引用し、理論によってではなく官僚機構キャンペーンで反対意見を葬り去ろうとする合言葉にすぎない」と答えた人がいた▼トロッキーが本当に闘ったのは革命の組織である党が官僚の組織に堕落することに対してであったろう▼一九二三年ロシア共産党第十二回大会に、レーニンはひん死の重態で大会に出席できなかった。もしレーニンが大会に出席していたなら彼が女秘書に語ったように「スターリンに爆弾を投げる」事件が起こり、ロシア革命以後のソビエトの社会は変わり、しいては世界共産主義運動も変っていたかも知れない。事実、レーニンは病床にあってなおかつフジョルジア民族の自治問題に関するスターリン一味の「植民地における総督のような」専横圧制に憤慨し、弾劾をこころみる決意をしたが、大会の数日前、三度目の発作におそわれ再び起つことができなかったのである。

激動の現代社会に、哲学への要求が再びよみがえりつつある。
この講座は、世界と人間生活との全体的な意味を問いなおすべく、学界における第一線の学者の総力を結集して一九六七年より刊行、昨年九月完結した。完結後一年、当時予約された方々以外の読者からの要望は益々強く、ここに重ねて講座を刊行して、広汎な要求にそうことにした。

岩波講座 哲学 全18巻
《内容見本進呈》

《全18巻の内容と編者》
第1巻 哲学の課題……務台理作 古在由重
第2巻 現代の哲学……古在由重 真下信一
第3巻 人間の哲学……務台理作 梅本克己
第4巻 歴史の哲学……林達夫 久野収
第5巻 社会の哲学……日高六郎 城塚登
第6巻 自然の哲学……坂田昌一 近藤洋逸
第7巻 哲学の概念と方法……出隆 粟田賢三
第8巻 存在と知識……桂寿一 岩崎武雄
第9巻 価値……粟田賢三 上山春平
第10巻 論理……沢田允茂 大森荘蔵 市井三郎
第11巻 言語……服部四郎 沢田允茂 田島節夫
第12巻 科学の方法……中村秀吉 古田光
第13巻 文化……鶴見俊輔 生松敬三
第14巻 芸術……桑原武夫 加藤周一
第15巻 宗教と道徳……滝沢克己 小倉志祥
第16巻 哲学の歴史Ⅰ……服部英次郎 藤沢令夫
第17巻 哲学の歴史Ⅱ……野田又夫 山崎正一
第18巻 日本の哲学……古田光 生松敬三

特色
▼現代の提起する諸問題の原理的な解明
▼自然科学、社会科学との緊密な関連
▼多様な立場からの問題追求とその交流
▼哲学の諸領域の多角的な照明
▼学界・在野を含む広範囲の執筆者層
▼初学者のよき入門書たることを期す

第一回配本 第1巻＝哲学の課題 発売
〈編集〉務台理作・古在由重
現代社会の複雑な発展を反映して、哲学への要求は次第に高まっている。本巻は、現代、哲学が担うべき課題はなにか、哲学の真の有効性とはなにかを設問し、哲学のあるべき姿について根底的な分析を行なう。特に、時代と哲学的理性とのかかわりあいの性格に多面的な照明をあてることを通じて、本講座全体の問題設定に方位を与えるのが、本巻の目標である。
《哲学における「現代」》
Ⅰ 哲学における現代……務台理作
Ⅱ 哲学の運命について……西順蔵
Ⅲ 哲学的思索と現代性……中村元
《現代の哲学への要請》
Ⅳ 現代における哲学の「課題」……京極純一
Ⅴ 科学論の哲学的諸問題……牧二郎
Ⅵ 『資本論』と弁証法……宇野弘蔵
《現代における哲学の使命》
Ⅶ 哲学の哲学性……藤沢令夫
Ⅷ 知識の有機化……沢田允茂
Ⅸ 万人の事としての哲学……滝沢克己
Ⅹ 試練にたつ哲学……古在由重
《シンポジウム》
Ⅺ 哲学と現代……城塚登 生松敬三 上山春平 古田光
A5判クロース装上製函入／平均三三〇頁
毎月10日一冊宛巻数順に刊行 各巻六五〇円
▼書店で実物をご覧ください。

第二次予約募集 申込締切 11月10日
全巻予約申込者のみにお頒ちいたします。申込期限までにお近くの小売書店へお申込み下さい。
岩波書店
東京都千代田区一ツ橋二-五-五
振替〈東京〉二六二四〇

闇への奈落

加藤泰論

〈時部〉の不可視性

「時代構造」花田清輝　（大光社刊）

「時代」から、シリーズ八日目（六月号）から、シリーズ八日目（六月号）までの、花田清輝の「時代構造」を、ひとつの問題として、ながめてみたいと思う。

それは、この論文の、「時代」の、「時部」の、「時代」の、「時部」の、「時代」の、「時部」